



ものすごく強い妻を支えた、 ありえないほど優しい夫

松本 侑壬子・ジャーナリスト

はっきり言って、サッチャー元英国首相は、その業績のわりに、どうも大衆人気が今ひとつ。アジアの多くの女性指導者のように有名な政治家の娘や妻として父や夫の後継者になったというのではなく、サッチャーさんは全く自分の意思で英国初の女性首相の座を勝ち取った。1979年から11年間の長期政権を守り、その剛腕ぶりから“鉄の女”のニックネームがついたのは周知のとおり。その間、「英国病」と呼ばれた祖国の経済危機をさまざまな荒療治でともかくも建て直し、20世紀で最も影響力をもつ政治家という評価もある。

だが、その陰で切り捨てられていった側からのネガティブな声は映画にも反映している。例えば、1984年にサッチャー政権が鎮圧した炭坑ゼネストを背景に何本も作られた映画は、いずれもヒューマン・ドラマとしてヒットし、各種映画祭での受賞も多い。潰された炭鉱町の元炭鉱労働者らがプラスバンドに希望を託す『プラス!』（1996）や炭坑労働者一家の末息子が好きなバレエへの夢を貫く『リトル・ダンサー』（2000）、あるいは鉄工所を解雇された金欠中年男6人組が一攫千金を狙ってストリップの舞台に立つ『フル・モンティ』（1997）もその時代の話。いわば、サッチャーに負けないで頑張った人間らしい人々の話、といった風情である。

こうした流れの中で、本作は初めてサッチャー

を一人の女性として内側から描く。脚本（アビ・モーガン＝『シェイム』）も監督（フィリダ・ロイド＝『マンマ・ミーア!』）も、そしてもちろん主演は大御所メルル・ストリープ、と大物女性トリオが顔を揃えた。ロイド監督が狙ったのは、もちろん「確信の政治家」を自称するサッチャーの表向きの活躍ぶりではない。そんなものは、ニュースで既に見慣れた風景だ。この映画で描かれるのは、家庭での素顔や個人としての悩みや喜びの姿である。公的な場面で反対勢力と対決する場合でも、その強さの源は？と、まるで問いかけのような視点に立っている。

「鉄の女」の確信を支えたのは、正義感だったのか、政治的野心だったのか。あるいは家族愛、とりわけ夫デニスとの愛だったのか。映画は、引退後（1990年保守党党首選で敗北）、一人静かに晩年を過ごすサッチャーの回想の形で描かれる。夫は既に他界し、子どもたちは独立した広い室内で、マーガレット（サッチャー）は、亡夫の遺品をやっと整理する決心をする。デニスは今もなおマーガレットの幻想の中に生きている。そして、朝食のテーブルに現れたり、子どもらの昔のビデオと一緒に見たり、日常生活の中でマーガレットに寄り添い、一人にはしておかないのだ。現実と幻想のあわいで、思い出すのは、「食器を洗って一生を終わりたいくない」という彼女に「だから君と結婚したいんだよ」とほほ笑んだデニス。その約束通り、いやそれ以上を守ってくれた。でも…。マーガレットは万感の思いで問いかけずにはいられない。「デニス、あなたはそれで幸せだった？」と。

サッチャーさんは、2008年出版の実娘の回想録で認知症と明記され、監督はそれに触発されて本作を製作したという。この演技でメルル・ストリープは第84回アカデミー賞主演女優賞を受賞した。

『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』

イギリス映画（105分）／フィリダ・ロイド監督

公開中

© 2011 Pathe Productions Limited, Channel Four Television Corporation and The British Film Institute

